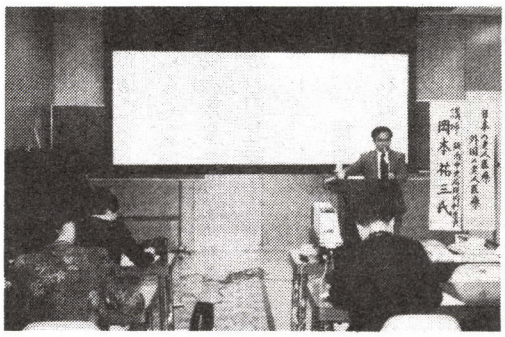
高齢化社会をよくする女性の会会報

No.41
1989年12月発行
高齢化社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿２－９－１
第31宮庭マンション802号室
ＴＥＬ.03-356-3564



―目　次―

第６回医療勉強会……1～2
キャノン・フォトコンテストに入賞して ……2～3
グループ紹介・長野……4
男・老いを語る⑯　阿部志郎……5
声・住みよい高齢者住宅……6
声・〝ケア付きアパート〟開設のお知らせ……7
書評 ……7
入会者・住所変更者・事務局だより ……8

■第六回老人医療勉強会報告■

岡本祐三氏講演（阪南中央病院内科医長）

外国の老人医療・日本の老人医療

――とくに地域医療について――

報告者　沖藤典子

第六回老人医療勉強会が、十月二十六日新宿文化センターにおいて開かれました。講師は阪南中央病院内科医長、岡本祐三先生です。

まず最初にアメリカのナーシングホーム、自助努力が強調されている社会の悲惨について概略説明がありました。この点については別の機会にもっと詳しくお聞きしたいものです。ナーシングホームにはいると一年で約六割が破産するそうです。老人虐待も多いとか。訴訟になりにくい現実があるようです。

ついで、スライドによる日本の在宅医療のケースが紹介されました。親も子も高齢化するなかで、資産継承を楽しみに介護する時代ではないという言葉が印象的でした。確かに、社会の工業化、都市化の現代において生産設備の、つまり生きていく手段の継承は消えています。三世代同居は農業社会を前提としています。個人のモラルの問題ではありません。

また、老人病院の劣悪をそのままにしていて、在宅ケアなどを言うのは意味がない、施設か在宅か自己決定権が現実にない日本の医療や福祉のありかたについて、鋭い批判がくだされました。在宅福祉のキー・パーソンはホーム・ヘルパーだと先生は断言しました。

そのあと、デンマークの福祉の紹介がされました。

デンマークでは老後不安を持っている人は十％しかいないそうです。その背景には人口一万人につき五十人のヘルパー、申し込んで二日で入れるナーシングホー

ム、しかもそのホームも二十㎡の個室、各室のトイレ・シャワー、入居者一人につき一人の職員配置など、在宅・施設共に日本とは比較にならない福祉の充実があります。なぜ寝たきりがいないのか、それは結局は介護力だという結論に私達は溜め息をつきました。

注目されるものに、補助機具センターがありました。これは、人口二～三十万人につき一カ所あり、市が買い上げています。すべての補助機具はここに用意されており、無料貸与を受けます。お年寄りの残存能力を高め、誇りを守るためにもすばらしいと思います。

「福祉に対する理念がカタチ化されている」というのが岡本先生の弁でした。

会場から、どうすればこういう福祉が作りあげられるのだろうかという質問がありました。学ぶことだというのが先生の回答です。

また、終了後もっと医療の制度そのものを知りたかったという意見もあり、今後の課題として残されました。

第一回キャノン・レディース・フォトコンテストに入賞して

六千点の中の四十一点の一つに選ばれた私の写真

向山タキ

8月10日、最終審査の結果、第1回キャノン・レディース・フォトコンテストで、以下の賞に決定しましたのでお知らせします。

決定賞名　スマイル賞
作品題名　おほっ！

〝女性の写真が　新しい〟
巡回展　東京銀座　9月18日～22日
札幌　10月16日～20日
名古屋　11月6日～10日
大阪梅田　11月24日～29日
福岡　12月11日～15日

最終決定に、私も思わず〝おほっ！〟枯木の山の彩りにと軽い気もちで出した一枚が、スマイル賞になるとは、思いもかけず、でもうれしい。

一年前、本格的に今のマニュアルカメラを中古品で手に入れ、モデルになってくれた森ハルヨさん（87歳）に何回か通った。

戦争で失った一人息子の話をしては涙

ぐみ、ガンで逝った夫の話をする度に、「おほっ！」と、きまってこの笑顔。

「婆（ばば）の写真なんか撮って、そんなに金を使うな、おやかた（夫のこと）に怒られるでしょうに」

「いいから、いっぱい撮って来いって？　いいおやかたか？　幸せか？　よかったなァ」

「いいなあ、わしも、自分の子から、おばあちゃんって言われたいよ」

「わしは、いつも、見ざる、聞かざる、言わざるよ。でも、いい孫でなあ」

「赤ん坊おんぶして、風呂敷包み一つ持って、五〇〇円もらって離縁されたとき、今のおやかたに会ったんよ。それから、死ぬたけ働いたよ。朝暗いうちから夜中まで、そして土地買って家を建てて、でも、おやかたに会って幸せだった」

「ガンで死ぬ時、いっしょに行こうって言ったけど、戦争で死んだ息子の33回忌済むまでは行かれない。許してくれって言った」

「おまんまは、山ほど盛って、水は、こぼれる位いっぱい、仏様にあげるんよ。ひもじかったら、いっぱいお食べ、いっしょに死んだ人と、お食べって」

「月一回病院へ行くんよ。車押してな。入院している同級生に言うよ。こんなとこから、早く出て来いって。外のこの空気にあたれば病気も治るよ。海に沈む夕日をみながら話そうって。朝の畑の空気の美味しいこと。私は、自由なんだよって。風にあたって、この緑の野菜を食べれば、病気しないよ。

90までは、生きようと思うけどな、おほっ！」

節くれ立った手で——働いた手！——顔をぐりっとなでた。

「また来てくれよな。ハツさんは、子どもがいていいなあ、じゃあな」

帰る時、大根や、じゃがいもや、玉ネギを、袋に入れて、おみやげにくれる。

おいしい、ほんとにおいしい。

森ハルヨさん、87歳、現役。

私の母の友人でもある、大地のような人である。

第７回シンポの新聞報道より

(17)　☆12版☆　1989年（平成元年）10月4日（水曜日）

おんなの輪　▷3◁　題字は書家・浅野弘子氏

政策提言で世を変える

全国55グループで取り組み

高齢社会（上）

介護に縛られる性

今年も九月の「敬老の日」に、高齢化社会への急ピッチな進行ぶりが数字で示され、あわせて「長寿社会の男女別の意識傾向」に関する調査も総務庁から発表された。男は年をとるほど妻依存を強め、女は地域交流を重視——と。

繰り返し言われることだが、女性は自分の老いを迎える前に親、夫の親、そして夫をみとり、その後に自身の長い孤独な老いを生きねばならない。在宅福祉が強調されるようになって、いっそう介護の負担は妻、嫁、娘の肩に重くのしかかり、女の後半生を縛る。

今、少なくとも中年以上の女性たちに最も関心の深いテーマは、高齢化社会をどう生きるか、ではなかろうか。地域婦人会など既存の団体もさまざまに取り上げるようになっているが、この問題に的を絞って取り組む活動グループが各地で続々と生まれている。

「女性による高齢化社会シンポジウム」が、先月、香川県高松市で開かれた。評論家の樋口恵子さんを代表とする「高齢化社会をよくする女性の会」が毎年催しているもので、今年で八回目。

七年前に初めて「女性による老人問題シンポジウム」を東京で開いたとき、会場側から次回の使用を断られるほど大勢が集まり、「なぜ女だけが介護の役を担わねばならないのか」—本音が噴出した。問題の余りの多さ、重さに、「老いの現実をより見つめてきた性として、これから女の目で見た高齢化社会についてどしどし提言していく必要がある。それには大勢で声をあげる方が効果的だし、刺激し合えば新しい発想も生まれやすい」（樋口さん）と、シンポジウムから約半年後、会として組織されることになった。

国を動かす主婦の声

会員は個人とグループからなるが、個人には福祉、医療、法律、社会学などさまざまな分野の専門家が多い。グループ参加は全国に広がっている。とりわけこの二、三年グループ入会がふえ、先月参加した「長野老後を考える会」で五十五となった。小林ぎん子さん（六三）（小県郡武石村）を中心にした、ほとんど農家の主婦ばかりの会だ。

各地の会員たちが顔を合わせ、互いに活動の情報を交換するのが、企画をこらした毎年のシンポジウム。が、決して愚痴のこぼし合いではなく、「調査・研究し、情報を集め提供し、何より政策提言の集団でありたい」というのが会の目的。

六年前には、女性の年金権について各政党の考えを聞く会を開き、「個としての平等を目指す年金制度の確立」を基本に具体的な要望をまとめて、厚生省と各党に提出した。

老人保健施設（いわゆる中間施設）が検討されだすと、早くからその必要を説いていた田中寿美子さん（前参院議員）を中心に専門家を加えて勉強会をつくり、「私たちの望む中間施設」について意見書を提出した。

一昨年末には、全国の会員の協力を得て、在宅福祉サービスの実態について、自治体と援護の必要な老人家庭の両側からの調査を行い、抜本的な制度の再構築を求める要望書をまとめて厚生省へ出すなど、次々と起こる問題に忙しく取り組んでいる。有料老人ホームについても見学や勉強会、シンポジウムなどを続けている。

「女性の自立と豊かな老いが両立する高齢化社会を目指し、具体的な政策をどんどん提案していく会でありたい。言い続ければ世の中変わるんです」。樋口さんは説いてやまない。

高齢化シンポジウムでは、シルバーファッションや介護寝間着のアイデアが展示された

「読売新聞」より転載

森茂先生の言葉をかりて言うなら、まさしく女の冬支度かも知れません。老後を生きるには最適な、信州の美しい自然と、広い耕地の真中に暮らしながら、やはり私達の求めるものは、老い行く者同士の心の連帯だったのです。

「長野にバスツアーがあるんです」と言われた時、何か心ひかれて、私達四人がその親睦会に参加させていただきました。

その夜の、皆さん方の熱気あふれる発言や行動に、すっかり感動し、地域に帰って、早速心ある人達に呼びかけたところ、即三十数人の仲間が意欲的に賛同して下さいました。

文字通り農家の主婦、そして私達を指導して下さる生活普及員の方数人の集まりです。それぞれ自立した農家の主婦が大半ですから、個性的でたくましく、問題意識も豊富、老いもロマンで行こうという人達ばかりです。準備会を経て、八月十七日に樋口先生の参加をいただき、発足の集いが出来ましたことは、何よりラッキーな事でした。「介護休暇・手当制度がもし制度化されたら、ねたきり老人看護は主婦の仕事として定義づけられるだろう」との先生の助言は、私達の取りくんでいる介護問題に一つの転機を与えて下さり、これからはデイホーム制度の確立、ショートステイ施設の拡充を行政に訴えることに決めました。

長野・老後を考える会

その外、老後の問題について廻る後継者の結婚問題、高齢者のためのバス路線の確保等、いろいろの課題をかかえての出発です。殊に、当然男にも老いがあるはずなのに、今度一人も名のりを上げないのは不思議ではないですか。その辺りも究明してみたいと思います。

何れにしても、ただ仕事にだけ追われていた農家の主婦が、老後をじっくり考える心の余裕に辿りつけた事は、本当にすばらしい事です。

華やかな行動は無理と思いますけれど、農村らしい老後の在り方を、みんなで探ってみようと思います。どうぞよろしく。

（小林ぎん子）

孤立と孤独

阿部志郎

私は還暦を過ぎた大正末の生れ。二人の娘は家庭をもち、一人は米国、もう一人は他県に住み、五人の孫と会えるのは年一回程度。二人だけというのに、妻はボランティア活動に、私は仕事で飛び廻り、ゆっくり家にくつろぐ暇もなく、淋しさは感じない。

でも、時に、心の中を深い不安がよぎる。ひとりになったら――。突然倒れたら――。ねたっきりになったら――。ぼけたときには――。

すなわち、社会的に孤立するのが怖いのである。社会的に孤立させぬのが社会福祉の営みということになろうか。

「孤独には耐えられても、社会的孤立には耐えられない」という。

いかに社会福祉が充実し、社会的な孤立からまぬがれたとしても、「孤独に耐える」という前提条件を必要とする。社会福祉は人間の魂の問題には介入できないのだから。孤独に耐えることが、老後の最大の人間的課題なのではあるまいか。

「夜中ふと目がさめると、骨を刺し心の凍る淋しさで、とても、耐えられません。」と語ったひとりぐらしの老女の衝撃的な言葉は、二〇年たっても私の脳裏を離れない。

一人でいる時にはひとりでいられるのが孤独に耐えることであろう。自分の置かれた状況を素直に受容し、自己の運命を愛することが孤独を乗り越える最善の方法であるに違いない。

一つの典型として、修道院を想起する。モナステリー（修道院）の「モナ」とは、ひとりできちんといる意であるが、私欲を捨てた人の連帯的集団が修道院の生活を形成しているのである。そこでは、自己の存在を越えた神との交りをもつことによって、自立が可能とされる。

孤独に耐える自信がなく、弱さに悩む私に、信仰が与えられていることを喜びとしなければならないと、自分に言い聞かせている。

（横須賀基督教社会館館長）

住みよい高齢者住宅

恒吉よし子

近年、どこへ行っても住宅展示場のない地方都市はないと思われる程です。美しくスマートなデザインと、オートメーションで何でもしてくれる便利さで購買意欲を誘っています。しかし住宅を、暮らしを包む器として考えたとき、まだまだ十分に配慮がなされているとはいえないように思います。

事故死の第一位は交通事故（約一万件）ですが、家庭内事故が第二位（約六千件）というのは意外に知られていません。死亡事故に至らなくても、怪我をして寝たきりになったという話はよく耳にします。一番安全でなければならない家庭内でこれほど事故が多いのはなぜなのでしょうか。

日本の伝統的生活様式からくる段差の多い生活空間、建築に携わる者のデザイン優先の考え方、効率や経済性重視の社会風潮などがあげられるかと思います。また、日本は住宅政策が遅れ、地価の高騰で高層建築にならざるを得ません。しかし、障害を持った人や高齢者にとって、高層化は余程の配慮がなければ生活できません。だれでもが安全に楽しく住める家こそが、本当の住宅だと思います。

今までの建築は、若く健康な人を対象に考えられてきましたが、ノーマライゼーションの考えを基に街づくりから見直して行こうという動きがでてきました。私達女性建築士の中に、育児や介護の担い手としての女性的視野で住宅を考えようというグループもできてきています。そういう流れの中で、岐阜県の女性建築士設計競技「女の館」において、障害者住宅の入選は意義あるものと思います。

高齢化の進展につれて、住宅のもつ役割はますます重要になって来ます。住宅は福祉の原点であるという考えを基に、医療や福祉関係との連携をとりつつ、住みよい住宅をめざして日々研鑽に努め、社会の要請に応えて行きたいと思います。

女性限定コンペで優秀賞

現実に即した未来住宅提案

鎌ケ谷の恒吉さん

鎌ケ谷市の女性建築士、恒吉よし子さん(59)が「女性がつくる21世紀のマイホーム設計競技」（岐阜県主催、建設省、日本建築士会連合会など後援）で優秀賞に入選、賞金五十万円を獲得した。

全国でも初という女性建築士に限定した同コンペには各地から百九十三点の応募があり、第一次審査、第二次審査、最終審査と厳しい選考の上、五点が入選となった。審査委員長の長谷川逸子氏の講評によると「住宅産業全体が経済的要因を最優先している現状に異議申し立てをしたいという意識」を持ち「生活を地つながりの中で真剣に取り組んだもの」が多かったという。

恒吉さんは数年前から障害者住宅に関心をもち、積極的に研究を進める中で知り合った吉田紗栄子さん（東京都）と共同で『住む人いろいろ…』と題して出品した。家族イコール（父＋母＋子ども二人）との概念を超えて（老年親＋中年子夫婦＋孫）といった今後予想される高齢化社会へのいい等を具体化。高齢者、障害者も楽に堂々と一緒に住んでゆけるものこそ家ではないかという主張は多くの支持を得た。

入選作品はモデル住宅として、岐阜県住宅供給公社が、岐阜市内に建築し、展示する。

また、来る十月六日（金）には表彰式およびシンポジウムが行われる。

（1989・8・5　船橋よみうり新聞より）

〝ケア付きアパート〟開設のお知らせ

新しいホームをつくる会

No.35号で〝よびかけ〟をし、このたび高年用ケア付きアパートを開設できる運びとなりました。紙面をお借りしてここまでお力添え下さった方々への感謝と共に、経過をご報告申し上げます。

「一棟全部、会が責任をもって借り受け家主さんには一切ご迷惑をかけません」と、物件探しに駆け回った半年。高齢者の入居に対する無理解と偏見に、経済大国ではあっても福祉大国とはいえない日本の姿をつくづく思い知らされました。

春、現在のオーナーにやっと出会えた安堵も束の間、いろいろな事情から、着工と完成の遅れや設計変更、家賃の値上げ等々で気の休まる暇もない月日が過ぎて、今、十二月半ばのスタートを間近に控え、準備に追われているところです。

九月初めに毎日と朝日の両紙に報道されると、問い合わせの電話が殺到、「安心して老後を生きることができる住まい」を求めている方が多いことを、改めて痛感しました。個人面談し、より切迫した状況の方から入居が決まり、一棟めは八二歳の女性を年長に六〇代まで、一組のご夫婦を含む六人の方が新しい生活への期待をふくらませておられます。

6畳・DK・ユニットバス付き。冷暖房完備。各室と事務所（責任者常駐）とのインターホンあり。家賃相当分の利用料月額6万2千円～7万1千円。必要時には実費で、次のサービスを提供。食事、医療・リハビリ・健康生活相談、カウンセリング、法律関係相談、家事援助、生きがい活動の紹介など。

可能な限り自立した自由な老後の暮らしと適切なサービスのあり方を、入居者と会が共に手をとり合ってつくり出す試みは、これから始まろうとしています。

二棟めの開設を'90年内に予定し、一方社団法人の設立に向けて、一人でも多くの会員を求めております私共の会に、何卒皆様のご支援をお願い申し上げます。

事務局 tel ○三―三一一―七○九三

（白川すみ子）

☆書　評☆

『老婚ばんざい』　福永　隆子著

（ミネルヴァ書房　一、六〇〇円税込）

「四十代ならばともかく、六十も過ぎてから再婚なんて考えるもんじゃありません！」

還暦すぎた著者の再婚の決意に、八十過ぎの母堂は激怒した。近ごろ注目を浴びている老婚には、一般に子どもたちが遺産がらみで反対することが多い、という。何よりも子どもたちに養ってもらう身では、老婚の自由もない。しかし著者たちは定年まで勤め上げて自立できる年金があり、子どもたちも賛成。にもかかわらず老母の反対で披露宴が一年以上延期というのだから、まさに高齢化社会の典型であり、老婚の花嫁にまた老母あり、の長寿国風景である。

著者はこの困難な老婚を持ち前の明るさとねばりで実現していくが、この本は決して「老婚」だけがテーマではない。当会最大のグループ会員仙台「あかねグループ」の創立者として、地域福祉活動をゼロからスタートさせている。定年後の女性の生き方、地域活動と結婚との両立などが語られていて、サブタイトルに「六十おんな奮戦記」とあるが、まさに「女の六十人生の華」と言いたくなる。

（樋口恵子）

1989年10月～11月入会者名簿

氏　名	〒	住　所	TEL
有馬　孝子	175	東京都板橋区高島平2-28-4-308	03-932-5797
西條　政子	761-21	香川県綾歌郡綾南町畑田964-110	
清川　紀代子	344-01	埼玉県北葛飾郡庄和町米島820-18	0487-46-0585
赤尾　ひろ子	771-02	徳島県板野郡北島町新喜来字江古川5-51	0886-98-7967
平野　美代子	864	熊本県荒尾市荒尾4160-164	0968-66-3072
今井　孝子	612	京都市伏見区深草鞍ケ谷13-65	075-642-7066
板橋　由美子	272	千葉県市川市大野町2-880	0473-37-5746
栗栖　須美子	730	広島市中区吉島東２丁目5-19	
村田　セツ子	824-05	福岡県田川郡大任町福田	0947-63-2365
川俣　稚代	309	茨城県西茨城郡友部町下市原259	
木越　光子	121	東京都足立区南花畑5-15　9-107	03-885-6388
板垣　恭子	203	東京都東久留米市滝山6-3-7-309	0424-74-9723
宇津崎　光代	617	京都府長岡京市天神2-3-7	
柴田　とよ子	210	川崎市幸区小向町11-4	044-541-1208
安藤　桂子	178	東京都練馬区東大泉3-30-13	03-925-5558
伊藤　千津子	525	滋賀県草津市西大路町10-5-307	0775-64-3403
角田　礼子	346	埼玉県久喜市青葉1-1-14-205	0480-22-6665
山川　麻子	277	千葉県柏市増尾51-86	
佐々木　悦	990	山形市末広町3-26	0236-24-0217
田中　ともえ	251	神奈川県藤沢市辻堂西海岸2-7-4-303	0466-36-2938
藤井　チズ子	272	千葉県市川市国府台5-4-15	0473-71-7455
岩田　京子	735	広島県安芸郡府中町石井城2-19-22	082-283-1487
谷口　幸子	967	福島県南会津郡田島町大字田島字大坪20-1県公舎1-3	
上野　千鶴子	606	京都市左京区一乗寺大新開町15-3 グランドムール一乗寺601	
鈴木　千恵子	379-13	群馬県利根郡月夜野町上津1238-1	
河合　一乃	486	愛知県春日井市東野町西2-3-9	0568-81-3406

10月～11月住所変更者

氏　名	〒	住　所	TEL
自主研究グループ (代表 小林美恵子)	416	静岡県富士市中島66-1	0545-61-4358
鈴木　しげ子	221	横浜市神奈川区沢渡4-2 神奈川社会福祉会館内　神奈川県老人クラブ連合会	045-311-1421 (内609)
中村　政子		(電話番号未記載)	0473-79-8471
宇津木　嘉子	135	東京都江東区豊州4-10-5-1403	03-536-0814
鈴木　芳子	180	武蔵野市西久保3-2-3　マスターズハウス武蔵野201号	
小泉　寿子	223	横浜市港北区箕輪町3-13-7	

事務局だより

★十二月のオープンハウスは、二十五日（月）になります。毎回、多くの方々が見えられ熱心に話し合われています。みな様のお越しをお待ちしています。

来年一月は、二十二日（月）です。

★今年度および過年度の会費未納の方には、振込用紙を同封させていただきましたので、ご納入お願い申し上げます。なお、二カ年分以上ご滞納の方は、来年三月をもって退会とみなさせていただきます。悪しからず、ご了承下さい。

★事務局は、十二月二十七日（水）から一月五日（金）まで、お休みさせていただきます。

今年は消費税に端を発して高齢化社会のことが随分クローズアップされたように思います。来年もますます女性が力を出せる年になればいいですね。代表の言葉を借りて、〝みんなでゲバルトローバになりましょう〟。どうぞよいお年を！

（事務局・中島民恵）